
ウルトラマンメビウス×バカとテストと召喚獣 僕と瑞希と (メビウス)の未来

矢車草大

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンメビウス×バカとテストと召喚獣 僕と瑞希と（メビウス）の未来

【Nコード】

N2590M

【作者名】

矢車草大

【あらすじ】

文月学園に通う高校生が、ウルトラマンメビウスとなって仲間と共に戦う物語。

メビウスを知らない人やバカテス知らない人にも出来るだけわかりやすく書こうと思います。

主人公&OPPテーマ設定(前書き)

はじめまして。今回思い切って小説を投稿することにしました。矢車草大です。未熟な上に初投稿ですが、楽しんでいただけると幸いです。

主人公&OPテーマ設定

日々乃未来（ヒビノミライ）

年齢 16歳

誕生日 7月17日

好きな物 カレー 友達 文月学園での生活

嫌いな物 友達を傷つける者

性格 純粹で優しい。少し天然ボケ気味で明らかな嘘も簡単に信じる。友達の為ならどんな小さな事でも一生懸命行動する。

恋愛の感覚がズれているため人の好意に気づかなかつたり、無意識に同性愛を応援していたりする。基本は敬語で話す。姫路瑞希とは幼なじみ。

召喚獣 CROW GUY'Sの隊員服にトライガーショットを装備している。

OPテーマ 「ウルトラマンメビウス」

主人公&OPPテーマ設定（後書き）

この作品では光の国出身のウルトラマン以外は登場させない予定ですのでご了承ください。

第1話 目覚めし勇者 宇宙斬鉄怪獣ディノソール 登場（前書き）

やっと1話が完成しました。ご指摘やアドバイスがあったらお願いします。

第1話 目覚めし勇者 宇宙斬鉄怪獣ティノゾール 登場

文月学園。とある新しい学習システムにより世間から注目されている進学校。多くのスポンサーが付いている事もあり学費も非常に安い。今日はその文月学園で進級時のクラスを決める「振り分け試験」の日だ。

文月学園にはA～Fまでの6つのクラスがあり、成績が特に良い者はAクラス。最も悪かった者はFクラスとゆう具合に振り分けられる。だがこのクラス分けは、ただクラスを決めるためのものではない。例えば、Aクラスに入れば電子黒板、個人用冷蔵庫、個人用エアコン、ノートパソコン、リクライニングシート、システムデスクといった高級ホテル並の設備で授業を受けられる。だがFクラスでは卓袱台に腐った畳と座布団、さらには廃屋の様な教室で授業を受けなければならない。そのため少しでもよい設備のクラスに入ろうと生徒は皆必死の努力をしていた。

「ひとつ！腹ペコのまま学校へ行かぬこと！ひとつ！天気の良い日に布団を干すこと！ひとつ！道を歩くときは車に気をつけること！ひとつ！他人の力を頼りにしないこと！ひとつ！土の上を裸足で走り回って遊ぶこと！」

文月学園の校門前で一人の少年が大きな声でそういつていた。

その少年に学園から出てきた大柄な男が話しかけた。「日々乃か。今日も早いな。」

「あつ、西村先生。おはようございます。」

少年の名は日々乃未来タツノミライ。この文月学園に通う高校生で今日は当然だが振り分け試験を受けに来たのだ。

もう片方の男は西村宗一ニシムラノウイチ。文月学園の教師であり、その強靱な肉体とトライアスロンが特技で趣味であることから鉄人てつじんのあだ名をつけ

られほとんどの生徒から恐れられている。

「しかし来るのが早すぎないか？試験が始まるまでまだ1時間以上あるぞ。」

「えっ、そうですか？いつもこのくらいの時間に来てますよ。」

「わざわざさっきの・・・確か五つの誓いといったか。あれをいうために早朝の門が開いてない時間に学校に来ているのは貴様位だぞ。」

「はい！大事な人に教わった大事な事だから毎日欠かさずいっていきます！」

「そうか。なら私は何も言わん。今日の振り分け試験も頑張れよ。・・・といつてもお前ならAクラスは確実だがな。」

「ありがとうございます。でも明久君と同じクラスになれないのは残念です。」

「・・・何故お前はあいつを友達だと認めてるんだ」

「先生！凄く頭が悪くてゲームや漫画ばかり買ってて生活費が足りない性で塩と水だけの生活をしてるからって明久君を悪く言わないで下さい！」

「ちよつと未来！それ以上僕を傷つけないで！」

いつの間にか未来の後方には未来の小学校の頃からの友達の吉井明久ヨシイアキヒサが立っていた。

「明久君、おはようございます。今日は珍しく早いですね。」

「おはようじゃないよ未来！さっきさりげなく僕を罵倒しなかった！？」

「えっ、悪く言ってたのは西村先生で僕は何も言っていないけど・・・」

「諦める明久。未来の天然ボケは今に始まった事じゃないだろ。」

明久のさらに後ろから友人の坂本雄二サカモトユウジが言った。

「それにお前の超人的なバカさに比べれば可愛いもんだ。」

「雄二までそんな事言わないでよ！僕はそこまでバカじゃないよ！」

「鳴くよウゲイス？」

「ホーホケキヨ？」

「バカ決定だな。」

「そうだな吉井お前はバカだ。」

「鉄人まで！2人共嫌いだ！」

「明久君も肌の色が黒くて暑苦しいからって西村先生を悪くいつてはだめです。」

「今一番俺を馬鹿にしたのはお前なのだがな……」「？」

試験開始15分前になった。これくらいの時間になるとほとんどの生徒達は参考書を開いて勉強するか最後の悪あがきに教科書をパラパラめくるか完全に諦めて寝ているかのどれかになると思われる。そして未来はというと……

「ひとつ！腹ペコのまま学校へ行かぬこと！」

まだ校門前で五つの誓いを言っていた。

「さて、そろそろ校門をしめ……って日々乃君!？」

そこに現れたのが学年主任の高橋タカハシ洋子ヨウコ女史だ。

「ひとつ！道を歩くとき車に「日々乃君！」あつ、高橋先生。おはようございます。」

「おはようではありません！今何時だと思っっているのですか!？」

「えっ、7時ですけど……ってあれ？この時計さつき見たときも7時だった様な」

「完全に壊れてるじゃないですか！あと10分もすれば試験は始まります！急がないと無得点でFクラスになりますよ！」

「ええっ！わっわかりました！高橋先生、ありがとうございます！」

未来はそういつて駆け出した。

「ひとつ！土の上を裸足で走り回って遊ぶこと！」

「そこまで大事ですか、それ……」

高橋女史はボソリと呟いた。

（あれ？五つの誓いつて誰から教わったんだっけ？大事な人のはずなのにどうして覚えていないんだろう……）

廊下を走りながら未来はそんな事を考えていた。

ダダダダダダダダダダダダダダダ バアンツ！

「すいません！遅くなりました！」

「あと15秒遅かったら遅刻だ。以後気をつけることだな。」
担当の教師が冷たく言った。

「怒られちゃったけど間に合ってよかった……あつ、瑞希ちゃん、おはようございます。」

「みつ、未来君……おはよう……ございます……」
未来が挨拶した少女は姫路瑞希^{ヒメジ ミズキ}。未来とは幼なじみで家も近くとも仲が良かった。

（あれ？瑞希ちゃん顔真っ赤だ。熱あるのかな？）
それに先ほどの声もかなり弱々しいものだった。誰が見ても具合が悪そうだった。

「あの、瑞希ちゃ「それでは振り分け試験、始め！」」
声をかけようとしたところで試験が始まってしまった。

（瑞希ちゃんが気になって集中できないよ……）
そして試験が始まってまもなく、それ《……》は起きた。
ガタンツ ドサツ

瑞希が倒れたのだ。

「瑞希ちゃん！大丈夫ですか！？」

未来は瑞希の額に手を当てた。

（……！ひどい熱だ！）

「日々乃、今は試験中だ、早く席に戻れ。」

担当教師が冷たく言い放った。

「でも、早く保健室に連れていかないと・・・」

「姫路、保健室に行きたいなら行け。ただし、試験の結果は無得点になるが良いか？」

「なっ!?!いくらなんでも酷すぎます!再試験には出来ないんですか?」

「ダメだ。体調管理も試験の内だからな。わかったらさっさと戻れ。」

未来は唇を噛みしめた。

「・・・わかりました。」

ガバツ

「えっ!?!みつ、未来君!?!」

未来は左腕で瑞希の背中を、右腕で膝を抱えている。世に言うお姫様抱っこの体制だ。

「だったら僕が保健室に連れていきます。」

「良いのか?お前も無得点扱いになるか?」

「構いません!」

未来はそう言つと瑞希を抱えたまま教室から出ていった。

広大な宇宙を飛ぶ巨大な青い怪獣、それはゆっくりとだが地球へと向かっていた。そしてその青い怪獣を見つめる怪しい巨大な影・・・
「ふっふっふっふっふっふっ。人間共よ、私に見せてもらおうか。
貴様らの恐怖と絶望を・・・それが私にとっての最高の糧かてになるのだ・・・」

放課後 文月学園の保健室

「ん・・・」

「あっ、よかった。目が覚めたんですね。」

瑞希は保健室のベッドで寝ていた。すぐ目の前には未来の顔がある。

時計を見ると既に放課後になっていた。

(未来君・・・今までずっと看病してくれたんですね・・・)

「先生が、ちゃんと休めば大丈夫だって。大したことなくて良かったです。」未来はそういつてホットミルクの入ったコップを瑞希に渡した。

「あの・・・」

「?どうかしたんですか?」

「ごめんなさい!」

「えっ?何で瑞希ちゃんが謝るんですか?」

「未来君が無得点になったのは私のせいです・・・私が体調を崩さなければこんなことには・・・」

「・・・瑞希ちゃん、僕は全然迷惑だなんて思ってないです。ただ、助けたかったから、助けたいと思ったから助けたいんです。だから瑞希ちゃんが謝る必要なんかないんです。」

「ですけど、それに。」瑞希の言葉を遮って未来は言い続ける。

「僕はお礼を言ってもらった方が嬉しいです。だからありがとうございます。と言ってください。」

「未来君・・・あっ、ありがとうございます。」

「どういたしまして。」

未来はそう言うのと優しく微笑んだ。瑞希はそれを見て顔をさらに赤くした。

「あれ?どうしたんですか?また顔赤くなってますよ。」

「えっ!?!えっ、これは、その、えっと・・・」

「あっ、もしかして熱かったですか?ホットミルク。じゃあちよつと冷ましますね。」

そういつて未来は瑞希からコップを受け取った。そして、

フーツ フーツ フーツ

「!」

息をかけてミルクを冷ましはじめた。

「はい。これで大丈夫だと思います。・・・えっ!?!また顔が赤く

なってますよ！頭から煙まで出てますし、まさか熱があがったんじゃない……」

自分の行動のせいでこうなったのにそれに気付かない未来。

「いつ、いえつ、大丈夫でしゅつ。」

大丈夫と言いながらおもいきり舌を噛んでいる瑞希。

「えつと……あの未来く「ギャアアアア！目がっ！目がああああっ！」」

瑞希が何か言おうとしたとき廊下から悲鳴が聞こえてきた。

明久は保健室へ向かっていた。理由は2つ。未来と一緒に帰るため迎えに来たのと、瑞希の様子を見に来たのだ。

「姫路さんをかばって途中退席なんて未来らしいな。ごめんよ未来。同じクラスにはなれそうにないよ。」明久自身は良くてCクラス、悪くてもDクラス位にはなれたと思っている。

ちなみに明久。「This is a pen」を日本語に訳すと？

「！ x? (;)」

……日本語にすら訳せないのか。せめてThis位はわかってくれ……

それはさておき、保健室に着いた明久は未来に声をかけようとした。

「未来、一緒に帰ろ「ごめんなさい！」」

明久の声は瑞希の謝罪に阻まれて2人の耳には入らなかった。なんとなく出ずらくなっただため保健室の戸に身を隠し、2人の会話を聞いていた。

そして未来がミルクを冷ましはじめた辺りで、

「微笑ましい光景だな……」

「何が？」

ビクッ

明久はとっさに後ろを振り向いた。そこに立っていたのは友人の島田美波マダミナミで背後に漆黒の闇を背負っていた。

「あんたね、他人のイチャイチャしてるとこ盗み見るなんてバカ

やってんじゃないわよ・・・ちよつと折檻が必要みたいね・・・」
「しつ、島田さん、僕は別にそんなつもりは」ぶすりっ「ギャアアアア！目がっ！目があああっ！」
美波は右手をチヨキにして、二本の指を明久の両目に突き立てた。
「あれ？明久君に島田さん、そんなところで何をしてるんですか？」
「あつ日々乃、ちよつとこのバカにお仕置きをただけよ。気にしないで。」

「未来、お願いだから気にして！このままじゃ僕の命がなくな脇腹に凄まじい痛みがああああああっ！」
美波が明久に強力な関節技をかけた。

「いい？日々乃、吉井は悪い事をしたからお仕置きを受けているの。このバカをかばう必要性は無いからね。」

「だから僕は悪くな左腕の間接がああああああっ！」
また関節技を食らう明久。

「あの明久君。今日一緒に帰りましょう。」

「何で今このタイミングでその話切り出すの！？」

「だってそのためにここに来たんですよね？」

「それはそう何だけど。」

「じゃあ折角だし皆でクレープでも食べに行かない？吉井の奢りで。」

「ちよつと島田さん！僕今週かなりピンチなんだけど！」

「ごめんなさい。僕は瑞希ちゃんを家に送りますから今回は遠慮します。」

「そつか、じゃあ吉井は2人の分ウチに奢りなさい。」

「僕に逃げ道は無いのかあああっ！」

明久はそんなことを言いながら床に拳を打ち付ける。「あはは・・・っ！」

突然未来が表情を一変させて深刻な顔になった。

「未来君？どうしたんですか？」

瑞希が未来の様子がおかしいことに気付き声をかけた。

「・・・来る！」

「「「えっ?」「」」

ガラッ ダッ

未来は保健室から飛び出し、駆け出した。

「みつ、未来君!? どうしたんですか!？」

「未来! ちよつと待って!」

「日々乃!? 急にどうしたのよ!？」

明久、美波は未来を追おうとする。瑞希もベッドから立ち上がったが、

「すつすみません、先に行つて下さい。」

病み上がりのためか上手く歩けない様だ。

「姫路さんはここで待ってて。すぐに未来を連れて戻るから。」

「ありがとうございます・・・吉井君、未来君をお願いします。」

「わかつたよ。任せて!」

明久はそういつて美波と共に走りだした。

「吉井、あんたつて瑞希には優しいのね。」

「えっ? 島田さん急にどうしたの?」

「何でもないわよ・・・」

文月学園の校庭に未来は出てきた。

(なんなんだ・・・凄く嫌なものが来る・・・でも、何で僕はそれがわかるんだろう・・・)

「未来!」

そこで明久と美波が校舎から出てきた。

「一体どうしたのさ、急に外に飛び出したりして。」

「それは・・・! 2人共、あれを!」

未来が空を指差した。2人がそちらを見ると巨大な物体が物凄いスピードで地上へと落下していた。

「あれつて・・・流れ星?」

「とゆうより隕石じゃない?」

みたいだし・・・」

「・・・あれっ？確かにそうですね。」

「って日々乃自身も分からないの!？」

「はい。さっきから頭の中で聞いたことの無い言葉がたくさん浮かんでくるんですけど、大体の意味が理解出来るんです。ディノゾールの事も。」

「・・・ってのんびり話してる場合じゃないよ！早く姫路さん連れて逃げなきゃ!」

ヒュンツ　ズバアツ　ヒュンツ　ズバアツ　ドガーーーーー
ーーーーー!

こうしている間にも街の被害はどんどん大きくなっている。

バシユン　バシユン　バシユン　ドガドガドガーーーーー!　自衛隊の戦闘機も到着し応戦しているがほとんど攻撃が効いていない。

ババババババババ　ドガドガドガドガドガーーーーー
ーーーーー

ディノゾールが背中から発射した弾丸でほとんどが打ち落とされてしまった。

「吉井、日々乃・・・ウチら、死ぬのかな・・・」

「島田さん！何言ってるのさ!」

「だって自衛隊でも勝てないのよ!あの怪獣をどうしろってゆうの!？」

美波の目からはもうすぐ死ぬ恐怖からか涙が溢れていた。

「・・・それは・・・きつと正義の味方が来て倒してくれるさ!」

「いるわけ無いでしょ!そんなもの!」

「・・・正義の・・・味方・・・はっ!」

その時未来は全てを思い出した。

『若き戦士よ。これでお前も立派な宇宙警備隊の一員だ。これからの活躍に期待する。』

『はい！ありがとうございます!』

『お前は私の自慢の教え子だ。胸を張っていけ。』
『教官、今までお世話になりました。』

『これよりこのエリアの哨戒任務に就きます。』
『初めての任務だからな。しっかりやれよ!』

『なっ、何だ!? 凄く強い力で引きずり込まれる……うわああああああああああああっ!』

「そつだ……僕はそれでこの世界へ……」

「未来君! 危ない!」

「……はっ!」

ヒュンツ サツ ズバアツ

未来はデイノゾールの斬撃を間一髪でかわした。校庭にはとても深い溝ができた。

「瑞希ちゃん!」

先ほど声をあげたのは心配になって校舎から出てきた瑞希だった。

「ギヤアアアアアアアツ!」

デイノゾールは自分の獲物を狩る邪魔をされたことに怒り、狙いを未来から瑞希に変えた。

バババババババババツ

デイノゾールは瑞希に背をむけ、無数の弾丸を発射した。

「キャアアアアアツ!」

「瑞希ちゃん!」

未来は思わず駆け出した。

「未来!」

「日々乃! 無茶よ!」

ザツ

自分の前に立ちふさがっているのだ。綺麗な乳白色の目、銀と赤の体色で50メートルはある巨大な体、胸に付いた青く透き通ったクリスタル。そして左腕には未来の腕にもあつた腕輪が付けられていた。

「日々乃が、・・・巨人に・・・」

「かつ、かつ、カッコいい!!」

「凄く・・・綺麗・・・」

3人はそれぞれ感想を述べた。

『僕は守ってみせる・・・大事な仲間を、そしてこの世界を・・・ウルトラマンとして!』

「セヤッ!」

未来、いや、ウルトラマンはディノゾールに対し戦闘ポーズをとった。

今この街に、いや、怪獣が存在するはずの無かつたこの世界に光の国からやってきた戦士。ウルトラマンメビウスが降り立った。

- T o b e C o n t i n u e d -

第1話 目覚めし勇者 宇宙斬鉄怪獣ディノゾール 登場（後書き）

用語解説

「ウルトラマンメビウス」種別・・・ウルトラマン

日々乃未来がメビウスブレスで変身した姿で宇宙警備隊のルーキー。ルーキーゆえに未熟な部分も多いが、人を守りたいとゆう気持ちは人一倍強い。

主な必殺技はメビウムシユート、メビウムブレードなど。

「メビウスブレス」種別・・・アイテム

ウルトラマンメビウスに変身するのに必要なアイテムで未来の左腕に出現する。変身後も装着されておりこれを使用して発動する技も多い。

「宇宙斬鉄怪獣ディノゾール」種別・・・怪獣

ウルトラマンメビウス第1話「運命の出会い」で初登場。メビウス本編では25年ぶりに地球に飛来した宇宙怪獣で防衛組織CROW

G U Y Sを一度全滅させている。

鋭く、あらゆるものを切り裂く舌が主な武器。

「ディノゾールリバー」&「とゆう変種へと進化した個体も存在する。

第2話 勇者メビウス 宇宙斬鉄怪獣ティノソール 暗黒怪鳥ノルヴァード 登

初オリジナル怪獣登場&初戦闘シーン・・・なんだけど何処かで見
たことある様な感じになってしまった・・・
文才が欲しい・・・

バカテスト 化学

調理に使用する鍋を制作する際に、重量が軽いとゆう理由でマグネシウムを材料に選んだのだが調理を始めると問題が発生した。

この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つあげなさい。

姫路瑞希の答え

問題点・・・マグネシウムは火にかけると酸素と激しく反応するため危険とゆう点。

合金例・・・ジュラルミン

コメント・・・正解です。合金なので鉄ではダメとゆう引っ掛け問題なのですが姫路さんは引っ掛かりませんでしたね。

日々乃未来の答え

問題点・・・マグネシウムは食べられません。

コメント・・・問題文で言っているのは料理の鍋ではなく料理に使う鍋です。

吉井明久の答え

合金例・・・超合金ニユーズ

コメント・・・先生もマジンカイザーは好きです・・・

「なんだよ・・・あれ・・・」

「もう一体怪獣が出てきやがった・・・」

「ハアッ！」

ガシッ

「ハアアアアアアアッ！」

ブンブンブンブンブンブンブンッ

「テヤッ！」

「ギヤアアアアアアアッ!?」

ズズズズズズズズズッ!

そしてディノゾールの首を抱えた後におもいつき振り回した後、街の外に放り投げた。

『よし！これで街の被害を気にせずに戦える！』

「ハアッ！」

メビウスはそのままディノゾールへと駆け出した。

同じ頃、宇宙空間では

「ちっ。まさかこの世界にウルトラマンがいるとはな・・・ディノゾールだけではダメか、仕方がない。」

巨大な影はそう呟くと丸いカプセルの様なものを取り出し、地球の方へと放り投げた。

「ゆけ！ノルヴァード！ディノゾールと共にあのウルトラマンを抹殺するのだ！」

バキィンッ

「ガアアアアアアッ！」

カプセルから出てきたのは巨大な鳥だった。漆黒の美しい翼をもつその鳥は暗黒怪鳥あんこくかいじゅうノルヴァードとゆう名前だった。

「ガアアアアアアッ！」

ノルヴァードは飛翔し、真っ直ぐ地球へと向かっていった。

「ハアアアアアッ！タアッ！」

メビウスはディノゾールに接近し、手刀を頭部にたたき込む。

「ギャアアツ！」

ヒュンツ　ズバアツ

「ダアツ！」

デイノゾールも負けじと舌で切り付ける。メビウスは数歩後退させられる。

「ハアツ！」

バシュツ　ズガアンツ

「ギャアアアアアアツ！」

メビウスはメビウスブレスに右手を添えた後に前に出しメビュームスラツシュとゆう光弾を放ち、デイノゾールの左目を攻撃した。

「凄い・・・自衛隊でも全然勝てなかったのに・・・」

美波はウルトラマンのパワーに驚愕していた。

「ねえ吉井、日々乃は・・・ウチらの友達だよね・・・」

「えっ？島田さん。何でそんな当たり前のこと聞くのさ。」

「そう・・・だよね・・・ううん、なんでもない。」

「？」

一方メビウスは再び戦闘ポーズをとり、デイノゾールに向かって走りだした。

「ハアアアアアツ！」

ポウツ　ズガアン！

「ダアツ！」

突如、メビウスの背中に火球が命中し、メビウスは思わず動きを止めた。

「ガアアアアアアツ！」

メビウスの後方からノルヴァードが飛翔してきた。

「げっ、もう一匹出てきた！」

明久が叫んだ。

『あれは、リトラ？いや・・・違う！』

ノルヴァードの姿は原始怪鳥リトラとゆう怪獣に酷似している。だがリトラは人間に友好的な怪獣で体の色も黒くはない。体のサイズ

も大きすぎる。そして何より、リトラはこんな恐ろしい目をしていないのだ。「ガアアアアアッ！」

ドガッ

「グワッ」

ザクッザクッザクッ

「ダアアアアッ！」

ノルヴァードはメビウスに体当たりを食らわせた後、くちばしでメビウスを突き始めた。

「ギャアアアアッ！」

バババババッ

ドガドガドガーン！

「デアアッ！」

さらにディノゾールが弾丸を発射してメビウスを攻撃する。

ズズズズズーン！

メビウスは耐え切れずにその場に膝をついてしまった。

「未来君！」

「未来！」

「日々乃！」

3人はメビウスを心配し、声を上げた。

カコオン・・・カコオン・・・カコオン・・・カコオン・・・カコオン・・・

「ハッ！」

遂にメビウスの胸に付いたカラータイマーが赤く点滅を始めた。

「未来君の胸が点滅している！？」

「どうゆうことなの？」

「・・・もしかしてピンチって事じゃ無いの？ゲームでも負けそうになったり時間切れになりそうになると赤くなったり音が鳴ったりするから・・・ってじゃあこのままじゃ未来が死ぬって事！？」

「！！そんな！」

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

メビウスは苦しそうに2体の怪獣を見てゆったりと立ち上がる。

「ゲウツ」
ズズンツ

がすぐにまた膝をついてしまった。

『ふっふっふっふっふっ。あのウルトラマンにはもう立つ力も残って無いようだな。ディノゾール！ノルヴァード！奴は捨て置き、人間共を攻撃せよ！』

あの謎の影はメビウスはもう何もできないと判断し、ディノゾールとノルヴァードに命令した。

「ギャアアアアアアアツ！」

「ガアアアアアアアアツ！」

ヒュンツ ヒュンツ ズバアツ ズバアツ ドガーーーーーン！

ディノゾールは次々と舌で建物を切り裂いてゆく。そしてノルヴァードは、

「おい！あの黒い鳥みたいな怪獣、こっちに来るぞ！」

「不味い！逃げる！」

避難した街の人々を狙って攻撃をしようとした。

ボウツ ボウツ

ノルヴァードは逃げる人々に向けて火球を放った。

「いやああああああつ！」

「助けてくれ！まだ死にたくねえよおおおおおつ！」

だが非情にも火球は避難した人々へと徐々に接近していた。

フツ ズガアン！

「ダアツ！」

「・・・えっ？」

だが街の人々には火球は命中しなかった。メビウスが街の人々を背にし自らの体でノルヴァードの火球を受けていたのだ。

『ちっ、まだそれだけの力は持っていたか。ディノゾール！ノルヴァード！見せしめだ。あのウルトラマンを徹底的に痛め付けてやれ！』

「ギャアアアアアアアツ！」

ヒュンツ ヒュンツ ズバアツ ズバアツ

「ダアアアアッ！」

ボウツ ボウツ ボウツ ズガズガズガァン！

「グワアアアアッ！」

デイノゾールは舌で、ノルヴァードは火球でメビウスを集中的に攻撃し始めた。

「あいつは怪獣じゃないのか・・・」

「味方なの・・・」

街の人々は口々にそういいだした。

カコオンカコオンカコオンカコオンカコオンカコオン

「！未来の胸の点滅がさつきより早くなってる！」

「それつてもうほとんど力が残って無いつてこと！？」

「そんな・・・未来君！もういいです！逃げて下さい！」

「瑞希！？今日々乃が逃げたら避難した人達が怪獣に殺されるのよ！」

「でもこのままじゃ未来君も殺されてしまつんですよ！せめて未来君だけでも逃げて下さい！」

「グウツ」

だがメビウスは首を横にふった。

『諦めちゃダメなんだ・・・僕が逃げたら街は怪獣に滅ぼされる・・・』

・何があつてもどんなに傷ついても命の限り弱い者を守り、戦う・・・

・それがウルトラマンだ！』

「グウウツ。」

メビウスは再び立ち上がり、デイノゾールとノルヴァードに向けてフラフラと歩きだす。

『まだ足掻くのか。諦めの悪い奴め。いい加減に死ね！』

「ギヤアアアアッ！」

ヒュンツ ヒュンツ ズバアツ ズバアツ

「グウウツ！」

「ガアアアアアッ！」

メビウスはメビュームブレードを構えながらノルヴァードに向けて走りだした。「ガアアアアアッ！」

ノルヴァードは起き上がって火球を放った。

ボウッ ボウッ

「ハアッ！ テヤッ！」

ガンッ！ キンッ！

「ガアッ!？」

メビウスはメビュームブレードでノルヴァードの火球を全て弾いた。

「テヤッ！」

ズバアッ！

ドガーーーーーン！

ノルヴァードはメビュームブレードで縦に真っ二つにされ、断末魔もあげずに爆発四散した。

「1体倒した！」

「いいぞ！そのままいけー！」

街から歓声上がる。

「ギャアアアアッ！」

このままでは自分もやられると思ったディノゾールは舌でメビウスを切り付けようとした。だが焦りのせいとその攻撃には大きな隙があった。

ヒュンッ

「ハアッ！」

ズバアッ

「ギャアアアアアアアッ！」

メビウスはその隙をつき、舌をメビュームブレードで切り落とした。

「タアッ！」

ドガッ

「ギャアアッ！」

ズズーーーーン

メビウスはディノゾールの顎を蹴りあげ空中で回転しながら着地し

た。

ディノゾールはそのまま地面に倒れこんだ。

サツ ブワアアア スウウウウツ

メビウスは変身した時の様に左腕を構え、メビウスブレスのクリスタルに右手を添え、両腕を左右に開きながらそれを回転させる。両腕は頭の上へと持っていていき、空中に巨大な の文字が描かれた。

「テヤツ！」

そのまま両手を十字の形に組み、必殺光線、メビウムシユートを放った。

ズガアアアアアアアアアアアアツ！

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

ズズズズズズズズズズズズ！

ドガーーーーー！

メビウムシユートを食らったディノゾールは前に倒れこみ、大爆発を起こした。

「よっしゃああああ！未来が勝ったああああつ！」

「凄い……2体共倒した……」

「未来君……よかった……」

明久は感激、美波は驚愕、瑞希は安心の声を出した。避難した人達からも歓喜の声が上がった。

「セアツ！」

メビウスは皆の方を見てゆっくり頷くと空の彼方へと飛んでいった。

「……つてあれ？未来飛んでつたね」

「飛んで行きましたね。」

「飛んで行ったわね。」

「……」

「大変だ！追い掛けなきゃ！」

「追い掛けるってどうやってよ！」

「そつだ！島田さん位の力があれば僕を未来のとこまで投げられ僕の腹に穴が開くほどの痛みがあああああああああつ！」

「とりあえずアンタは死になさい！」

「そんな！せつかく怪獣の驚異から逃れられたのに！」

「よっ、吉井君も美波ちゃんも落ち着いて下さい！」

ドサツ

そんなやり取りをしている3人の後ろで何かが倒れた音がした。後ろを振り向くと未来が仰向けで寝ていた。

「みつ、……未来君！」

ガバツ

瑞希は目に涙を浮かべながら思わず未来に抱きついていた。

「……えへへっ、僕、勝ちましたよ……守れたんです……皆を……」

「よかった……未来君が無事で本当に……」

バサツ

「……あれ？未来？姫路さん？」

よく見ると未来は疲れ切って眠っており、瑞希も病み上がりのせいか未来に抱きついたまま眠ってしまった。

「吉井、どうする？」

「……そうだ！いいこと思いついた！」

「えっ？何？」

「島田さんが2人を背負って」「ミシィツ！」「スミマセンジョウダンデス……」

結局未来の両親に連絡して迎えに来てもらったのだった。

宇宙空間にて

「ちいつ、まさか怪獣を2体もやられるとは……あのウルトラマン、戦い方はまだまだだがなかなかやるな。まあいい。駒はいくらでもある……」

巨大な影はそう呟いた。

- To be Continued -

第2話 勇者メビウス 宇宙斬鉄怪獣ティノソール 暗黒怪鳥ノルヴァード

用語解説

「姫路瑞希」種別・・・登場人物

「バカとテストと召喚獣」のメインヒロイン。原作とは違い本作では未来の事が好き。学年次席の成績とその可愛い容姿の為校内での人気も高い。召喚獣は鎧と大剣を装備している。

「吉井明久」種別・・・登場人物

「バカとテストと召喚獣」の主人公。学園の教師が認める程のバカで学園でただひとり、『バカの代名詞』と言われているある肩書きを持っている。好物はパエリア。召喚獣は改造学ランに木刀を装備している。

「暗黒怪鳥ノルヴァード」種別・・・怪獣

本作オリジナルの怪獣。原始怪鳥リトラとゆう怪獣とそっくりだが関係は不明。口から吐く火球と鋭いくちばしが主な武器。

原始怪鳥リトラはウルトラQ第1話「ゴメスを倒せ！」で初登場。

第3話 もつひとつの世界 どくる怪獣 レッドキング登場(前書き)

前半は解説、後半は戦闘が主になっています。また回想の中で昭和ウルトラマンが登場するのでお楽しみに。

第3話 もつひとつの世界 どくる怪獣 レッドキング登場

バカテスト 国語

次の意味を持つことわざを答えなさい。

- (1) 得意なことでも失敗してしまう事
- (2) 悪いことがあったうえに更に悪いことがあったとゆうたとえ

姫路瑞希の答え

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

コメント・・・正解です。(1)は他に『猿も木から落ちる』『河童の川流れ』(2)は『踏んだり蹴ったり』『弱り目に祟り目』などがあります。

吉井明久の答え

- (1) 猿を木で殴る
 - (2) 泣きつ面蹴ったり
- コメント・・・君は鬼ですか

日々乃未来の答え

- (1) 殴られた猿を治療します
 - (2) 蹴られたところを冷やしてあげます
- コメント・・・吉井君の尻拭いですか

振り分け試験より数日後の朝、未来の家にて
「みっちゃんーん！朝だよー！起きてー！」

「えっ？勘違いしてもらっちゃ困るな！。ちゅーするのは姫ちゃんだよ。」

「ええっ!?!」

ボンツと音を立てて瑞希の顔が真っ赤になる。

「だってもうちよいすればみつちゃん結婚するんでしょ？今のうちに練習しとくのもいいじゃん。」

「えっ、でも、それはえっとぐにゅっ!」

興奮のあまり、おもいつきり舌を嚙んだ瑞希。

「・・・大丈夫?」

「ひゃい・・・」

「・・・ふわあああつ。あつ、母さん、瑞希ちゃん、おはようございます。」

なんかよくわからないタイミングで未来が起きた。

「みつ、みつちゃんおはよー。(ほら、みつちゃん起きちゃったじゃん。勿体ない。)」

「未来君、おはようございます。(だって、恥ずかしいです・・・)」

そんな平和な朝だった。

明久の家にて

今リビングに、未来、瑞希、明久、美波の4人が集まっている。未来が全て思い出したから話しておく必要があると言い、皆を召集したのだ。

「それで、なんで日々乃はあの巨人に変身できるの?」

「島田さん、来て一番最初に言うセリフがそれなの?」

「吉井は気にならないの?日々乃が変身できる事が。」

「それはそうだけどもあまり気にしてないかな。正義の味方に秘密があるのは当たり前だし。」

「アンタはやっぱり楽天的ね・・・」

「・・・その質問にはもちろん答えます。ですがその前に言わなけ

ればならない事があります。

僕はこの世界の住民ではありません。」

「……えっ!?!」

未来は開口一番からとんでもない事を言いだした。

「確かにこの星は地球です。でも、僕の知ってる地球とは明らかに異なった歴史を持っているんです。」

「じゃあ、未来君が知ってる地球は……」

「僕の知ってる地球は、かつて何度も怪獣や宇宙人の侵略にあつてきました。ですが、どこを探してもそれらしい資料が見つからないのです。」

「宇宙人までいるの!?!」

「日々乃の世界ってそんなに危険なの!?!」

「私達の世界は……平和な方だったんですね……」

この世界でも人間同士での戦争は何度も起きています。だが宇宙人や怪獣との戦争など考えられた事もなかった。

「ですが、僕達ウルトラ戦士と、地球の人間達が協力し合い、その侵略をことごとく退けてきました。」

「僕達って、もしかして、未来も宇宙人なの?」

「……はい。僕の故郷はM78星雲ウルトラの星、光の国です。」

「RPGで出てきそうな名前だね。」

「吉井、アンタは黙ってなさい。」

「……それでどうして未来君は私達の世界に来たんですか?」

「……今から16年前、全宇宙の平和を守るために組織された宇宙警備隊の隊員に任命されたばかりの僕はとある銀河系の哨戒任務に就いていました。」

16年前、とある銀河系にて宇宙空間を2体の巨人が飛翔していた。片方はウルトラマンメビウス、もう片方の巨人はウルトラ兄弟の3番目ウルトラセブンだ。

「よしメビウス、これから我々はこのエリアの哨戒任務に就く。」
「ウルトラセブン、僕は何をしたら良いんですか?」「私のサポートを頼む。ただし何か異常を感知したらすぐ私に知らせる。決して自分1人でどうにかしようとはするな。君にとって初めての任務だからな、しっかりやるぞ!」
「はい!」

その任務は特に異常も無く、無事に終わろうとしていた。

「むっ、あれは・・・」
ウルトラセブンの目の先には一機の円盤があった。

「あれは、ペダン星人の円盤!」
「ペダン星とこのエリアは遠く離れている。明らかに怪しいな。」
2人が話していると、円盤はこちらに気付いたのか、急加速して、発進した。

「まずい!追わなきゃ!」
「待てメビウス!今の君ではペダン星人の科学力にはとても叶わない。私が追う。君は光の国に報告のウルトラサインを送ってくれ。」
セブンはそう言って円盤を追って行ってしまった。
「・・・仕方がないか。正式に隊員に任命されたとはいえまだ僕はルーキーだからな。とりあえず本国にウルトラサインを・・・ん? うわっ!」

突然メビウスのすぐ近くに巨大なワームホールが現れた。

「なっなんだこれは!?逃げなきゃ!」
メビウスは必死に飛び立とうとするが、

「ちっ力が出ない!?ダメだ、引きずり込まれる・・・うわあああああああああああああああつ!」
メビウスを飲み込んだワームホールはまもなく消滅した。

「そして・・・目が覚めた時には、僕は人間の赤ん坊になっていて、全ての記憶を失っていました・・・」

「結局何が原因でこの世界に来たかはわからないんですね。」

「話の中で気になった事があるんだけど、ウルトラサインって何? 明久が素朴な疑問を未来に尋ねた。」

「ウルトラサインは簡単に説明すると一種の通信能力です。空にウルトラ文字を表示して他のウルトラマン達のメッセージを送るんです。」

「なるほど。」

「あの、私もひとつ気になった事があるんですけどいいですか?」

「はい。何ですか?」

「未来君が怪獣の攻撃を受けたときに胸のランプが点滅してましたよね?あれは何なんですか?」

「胸のランプ・・・カラータイマーの事ですね。あれはウルトラマンの危険信号なんです。」

「やっぱりピンチの時に点滅するの?」

「はい。大きなダメージを受けた時や活動時間が限界に近づくと赤くなるんです。」

「活動時間?日々乃、ウルトラマンの活動時間でどれくらいあるの?」

「おおよそ3分です。」

「「3分!?」「ちょっと待って! たったそれだけしか戦えないの!?!」」

「その時間を超え、カラータイマーから光が消えたら・・・ウルトラマンは・・・二度と立ち上がる事は出来ません。」

「「!!」」

「足腰が悪くなるのがふうっ！」

明久が瑞希と美波におもいつきり殴られた。

「何でこんな時に話の腰を折るのよ！」

「吉井君！もつと真面目に聞いて下さい！」

「いや、結構真面目に言ったんだけど……」

それはそれで問題だ。

「で、結局のところ、カラータイマーが消えたらウルトラマンは死ぬって訳でしょ。」

「はい。最初に地球を訪れたウルトラマンがかつて地球で死亡した時もカラータイマーの光が消滅していました。」

「完全な超人ではないんですね……」「ウルトラマンも地球の人間と同じ、生き物なんです。傷つき倒れ、死ぬ事もあります。」

「そうなんだ……」

「みつ 未来君は絶対に死なないで下さいね！」

「はい！大丈夫です！」

未来が大きな声で宣言した時だった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「じつ地震!？」

「この世の終わり!？」

「違います!この感じは……怪獣です!」

ズガアアアアアアアアアアアアアアアア!

「ピギヤアアアアアアアアアア!」

街の郊外の地面を突き破り、巨大な怪獣が現れた。

非常にシンプルな見た目でありながら、凶暴な雰囲気を感じた。

「あれは、レッドキング!」

窓から怪獣を見た未来が言った。

「知ってるの?」

「凄く凶暴で、好戦的な怪獣なんです!おそらく放っておけば、街を全て破壊するまで暴れ続けます!」

未来はそう言うのと立ち上がった。

「また戦いに行くんですか？」

「このままでは多くの人々が犠牲になります。僕が怪獣を止めなければいけないんです。」

「わかりました。未来君、絶対に帰って来て下さいね！」

「僕達は未来の事を応援するからおもいつきり戦って来て！」

「ウチも日々乃を応援する。吉井よりずっと頼りになるしね。」

「島田さん！さりげなく酷い！」

「わかりました。見ていて下さい。僕の戦いを！」

サツ キュイイイン

未来が左腕を構えてメビウスブレスを出した。

サツ ブウウウン

右手でメビウスブレスのクリスタルを回転させ、叫びながら上に掲げた。

「メビウウウス！」

ブウウウン「ヘアッ！」

そして未来はウルトラマンメビウスに変身した。

「ピギヤアアアッ！」

レッドキングが街に侵入し暴れ始めた。

「畜生が。こないだといい今日といい、どうしてあんなでけー怪物が出るんだよ！」

レッドキングが暴れている場所からそう遠くない公園で坂本雄二はそう呟いた。「とりあえずお袋に連絡しねーと。こないだなんかみかんを食ってて避難するのが遅れたって幾つみかんを食ったんだよアイツは！」

怪獣が出てても自分の命よりみかんが大事か。ある意味尊敬に値する。

「ピギヤッ！」

ブウウウン スガアアアアン！ ブウウウン ドガアアアアン！
レッドキングは腕や尻尾を振り回し、街を次々と破壊してゆく。

ドガアアアアン！

「ぬわっ！」

バタッ！

「げっ！秀吉！？」

何かが倒れた音を聞いた雄二はそっちの方を向いた。そこではクラスメートの女子、ではなくクラスメートの男子、キノシタヒデオシ木下秀吉が尻餅をついていた。

「秀吉、大丈夫か？」

「雄二か、すまぬ。うっ！」

立とうとする秀吉の左足首を激痛が襲った。

「足を変に捻ってしまったようじゃ。」

「何！？大丈夫か、秀吉？」

「ダメじゃ、うまく立てぬ。まずい！あの怪物がわしらに気づいたようじゃぞ！」

「ピギヤアアアアアアッ！」

ガシッ

レッドキングは近くにあったビルの大きな残骸を手に取り、動けない2人に投げつけた。

「ダメだ、逃げ切れねえ！」

「すまぬ雄二・・・わしの性で・・・」

2人が死を覚悟した時だった。

フツ　ズガアン！

「デアアッ！」

メビウスが2人の前に現れたのだ。レッドキングの投げたビルの残骸はメビウスの背中に直撃した。

「こないだの巨人！？」

「わしらを助けてくれたのか！？」

メビウスはゆっくり頷くとレッドキングに向き合い戦闘ポーズをとった。

「セヤッ！」

「ピギヤアアアッ！」

レッドキングは両手を叩いてからメビウスに突っ込んで来た。
ドゴオッ！

「デアッ！」

メビウスは腹にレッドキングの頭突きをもろに食らってしまった。

「ピギヤッ！」

ガスッ ドガッ

「グウッ ダアッ！」

さらに右、左の連続パンチを食らい、メビウスはよろける。

「どうしたのじゃ？ 一方的にやられておるぞ。」

「俺たちが近くににいるからむやみに動けないんだろ。だが秀吉は立てねーし・・・仕方ねえ。」

雄二は秀吉を背負って立ち上がった。

「ゆっ雄二！？いきなり何をするのじゃ！？」

「非常時だから我慢してくれ。このまま安全なところまで行くぞ。しつかり捕まってるよ！」

雄二はそう言うのと秀吉を背に抱えたまま走りだした。

メビウスは2人が公園から離れた事を確認すると、レッドキングの喉元に手刀を叩きつけた。

「デアッ！」

バシィッ

「ピギヤッ！」

「テヤッ！」

バキィッ

「ピギィッ！」

ズズーーン！

さらにメビウスはレッドキングの頭部に後ろ回し蹴りを叩き込んだ。
レッドキングは後ろに大きく倒れた。

「ハアッ！」

ガシッ

「タアッ！」

ズガアアアアン！

「ピギヤアアアア！」

メビウスは倒れたレッドキングの尻尾を掴みそのまま背負い投げで地面に叩きつけた。

「ハアッ！ テヤッ！」

バシィッ バシィッ

メビウスは倒れたレッドキングにのしかかり、手刀を連続で食らわせた。

「ピッ、ピギヤアアアア！」

ガシッ ガッ

「デアッ！」

『しまった！目が・・・』

レッドキングは近くに落ちていた自動車を掴んでメビウスの顔に投げつけた。自動車はメビウスの左目に直撃し、メビウスは思わず目を押さえてしまう。

「ピギヤアアアアッ！」

ガブッ

「ダアアッ！」

レッドキングはメビウスの右手におもいつきり噛み付いた。

ググググググ

「グウウウッ」

噛む力が徐々に強くなり、メビウスは苦しそうな声を上げた。

カコオンカコオンカコオンカコオンカコオンカコオンカコオン

ついにメビウスの胸のカラータイマーが鳴り始めた。「巨人の胸が！」

「このままじゃマズいつて事か！？なんとか助けねーと！」

「助けると言っても、わしらに出来ることがあるのか！？」

「それはわからねーけど、助けてもらって助けられっぱなしっての

が嫌なんだよ！」

メビウスとレッドキングが戦っている場所からなんとか逃げられた雄二と秀吉はそんな言い合いをしていた。

「あつ、坂本君に木下君！」

そこに瑞希、明久、美波の3人がやって来た。

「雄二！秀吉をおんぶなんてうらやまげフンゲフン。2人共、大丈夫？」

美波にギロリと睨み付けられたため小さくなる明久。

「わしも雄二もたいした怪我はしておらん。じゃがああの巨人が・・・

」

「げっ！みつ、じゃなくてウルトラマンメビウスのカラータイマーが！」

メビウスのカラータイマーが激しく点滅しているのを見て驚く明久。

「・・・ウルトラマンメビウス？」

「明久、からーたいまーとはなんじゃ？」

「げっ！あつ、いやえーとその「そういえばみつって言い掛けてたよな。お前何を知ってた？」なっ、何言ってるのさ雄二！僕は未来がウルトラマンだなんて事もカラータイマーが消えたらウルトラマンが死ぬって事も知らなきゃあああああつ！爪先が！僕の爪先が潰れる！」

「吉井！おもいつきりばらしてるじゃない！」

美波におもいつきり爪先を踏まれて痛がる明久。

「なんだと明久！？あの巨人は未来なのか！？」

「しかもあの光が消えたら未来が死ぬじゃと！？このままでは未来は・・・」

「諦めたらダメです！心に希望を持ち続ける事がウルトラマンさんの力になるんです！」

瑞希はこれまでに無い強い口調でそう言った。

「ウルトラマンさん！負けないで下さい！」

瑞希が大きな声でメビウスに言った。

メビウスは頷くと右手に噛み付いているレッドキングの頭を左手でおもいつきり殴り付けた。

「テヤッ！」

ドゴオツ

「ピギヤッ！」

「タアッ！」

ドガッ

「ピギイツ！」

殴られたレッドキングはメビウスの右手に噛み付いていた口を離した。そこにメビウスのキックが顎に決まり、レッドキングは数歩後退する。

「そうか、それが未来の・・・ウルトラマンって奴の力の源か。ウルトラマン！そんな奴ぶっ倒しちまえ！」

雄二が大声で叫んだ。

「わしもお主を信じるぞ！お主がいればどんな怪獣が来ても負ける気がせぬぞ！」

秀吉もメビウスに応援の言葉を言った。

『雄二君・・・秀吉君・・・ありがとう！これで僕は、また強くなれる！』

サッ ブワアアアアッ スウウウウッ

「セヤッ！」

メビウスはメビュームシユートをレッドキングに向けて放った。

ズガアアアアアアアアアアアアアッ！

「ピギヤアアアアアッ！」

ドガアアアアアアアアアアアアアッ！

メビュームシユートを食らったレッドキングは後ろに大きく倒れて大爆発を起こした。

「すげえ・・・また勝っちゃった。」

「ウルトラマンメビウス・・・か」

雄二と秀吉はメビウスを見上げて呟いた。

「セヤツ！」

メビウスはそんな2人を見てゆつくり頷くと空へと飛んでいった。

「よっしゃあ！未来が勝って良かった！それじゃ喜びのハイタツがふうっ！ちよっ！島田さん！？未来が勝ったのに何で僕を殴るのさ！」

ハイタツチをしようとしたところで明久の顔に美波の左ストレートが決まった。

「アンタが迂闊にウルトラマンの正体をバラすからでしょ！」

「そうですねよ吉井君！坂本君と木下君でしたから大丈夫でしたけど、他の人に聞かれていたら大変でしたよ！」

「そこは本当にゴメンなさい・・・」

「それにしても未来の奴、何でウルトラマンなんかになれるんだ？」

「それは「僕が説明します。」うわっ！びっくりした！未来、いつの間にならなっ！」

「今来たばかりですけど・・・いてっ！」

そう言つて未来は右手を押さえた。

「未来君！大丈夫ですか！？そういうえば目も怪我してましたけど・・・」

「目の方は大したこと無いんですけど、こっちは結構深く噛み付かれましたから・・・いたたたっ。」

「これは医者に見せたほうが良いのではないか？」

「そうですね。うわっ！」

バタツ

「いてててて、あつ足に力が入らない・・・」

「ったくしよーがねーな。肩貸してやるよ。明久、手伝え。」

「あつ、うんわかった。」

未来は雄二と明久の肩を借りてなんとか立ち上がった。

「雄二君、ありがとうございます。」

「気にすんな。命の恩人にこれくらいはしてやらねーとな。ただし明久は10発殴らせる。」

「えっ！？何で僕が殴られる必要があるの！？」

「未来の正体をバラした罰だ。」

「雄二君！それはあんまりです！」

未来が止めに入ったが

「違うんだ未来、これは明久が望んでいる事なんだ。アイツは10発殴られる事が趣味なんだよ。」

「あっそうなんですか。」

「ちよつと未来！そこであつさり納得しないで！」

「よっ吉井！よっよかつたらウチが10発殴ってあげようか／＼／＼？」

「えっ！？島田さんの罰はもう終わったんじゃ無かったの！？」

「あのっ・・・未来君は何回殴られるのがいいですか／＼／＼？」

「姫路、それを聞いてどうするつもりなのじゃ・・・」

とんでもない混沌がその場を支配した・・・

未来の家にて

愛美は夕食のカレーを温めながら小さい声で呟いた。

「みつちゃん・・・頑張ったね・・・」

- T o b e C o n t e n e d -

第3話 もうひとつの世界 どくる怪獣 レッドキング登場（後書き）

用語解説

「ウルトラセブン」種別・・・ウルトラマン

宇宙警備隊のエリート、ウルトラ兄弟の3番目。モロボシ ダンの名前でウルトラ警備隊の隊員として宇宙人達の侵略から地球を守った。又、宇宙パトロール隊MACの隊長としてウルトラマンレオを鍛え上げた人物である。必殺技はアイスラッガー、エメリウム光線など。

「島田美波」種別・・・登場人物

明久の友達の1人。大きな黄色のリボンとポニーテールが特徴。ドイツからの帰国子女で漢字が読めない。明久にはある出来事が原因で好意を抱いているが感情の裏返しでキツイ態度をとってしまう。

「坂本雄二」種別・・・登場人物

明久の友達の1人。明久の事は友人として信頼しているが扱いは一番酷い。小学校の頃は『神童』と言われていたが今は見る影もない。天然ボケの母親に苦労している。

「どくる怪獣レッドキング」種別・・・怪獣

ウルトラマン第8話『怪獣無法地帯』で初登場。凶暴で好戦的な性格でありながらどこか憎めないコミカルな行動をする。必殺技は怪力パンチや岩石投げなど。ウルトラ怪獣の中での知名度はかなり高い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2590m/>

ウルトラマンメビウス×バカとテストと召喚獣 僕と瑞希と (メビウス)の未来

2010年10月14日21時33分発行